

死者と生者の間に⑥

おやさと研究所教授
堀内 みどり Midori Horiuchi

「死者」儀礼と遺された人々 (続き)

『「お墓」の誕生—死者祭祀の民俗誌』(岩波新書、2006)を著した岩田重則氏は、先行研究や自らのフィールドワークなどを通して、日本社会では、生から死への移行期には靈魂は肉体から離脱しやすいと思われていた、肉体と靈魂が分離するという観念が存在していると指摘しました。岩田氏は、この観念が、民俗学の定説では、肉体と靈魂との分離を促進する役割を持つものとして説明されてきましたが、葬送の儀礼そのものの観察からは、むしろ肉体と靈魂を分離させないような仕組みになっているのではないかと述べています。葬送の儀礼は、時代の流れの中で、仏教的なものや融合しながら、それまでのものが併存するように変遷し、先祖代々の墓というような形をとるようになって、「葬式仏教」的先祖祭祀が、仏教以前の死霊祭祀とは互いに質的に独立したまま、排除することなく共存しているとまとめていました。

一方で、荒々(新々)しいケガレた状態にある新しい死者は、葬儀やそれに続く年忌(年祭)を行うことにより、死者の靈魂は完全にキヨメられ祖霊になるという定説を形づくった柳田国男の『先祖の話』は、「一定の年月を過ぎると、祖霊は個性を棄て、融合して一体になるもの」であり、やがて、その祖霊は新しい肉体に入り込み生まれかわるものである(「魂の若返り」、生まれ変わるためには靈魂は肉体から離れることが必要)と説明されてきました。また、死あるいは死者が「黒不浄(死の穢れ)」として認識されてきたこと、ケガレがしばしば「ケ(氣)ガレ(枯れ)」と説明すること、波平恵美子氏が「(死の)儀礼の数々が、ケガレを祓い去り、取り除こうとする意味を持つ」「(死の発生によって引き起こされたケガレを)元の状態に戻す」と指摘していることなどを考えあわせてみますと、死の直後に引き続いて行なわれる葬送の儀礼は、死や死者を「ケガレ」と見ることに端を発し、第1には、そのケガレが儀礼を行なっている生者に及ばないようにして、無事に元の生活場面に戻しているのではないかと考えられます。そして、何年にもわたって継続される儀礼の中で、死者も清められて、やがて先祖になっていく、あるいは生まれ変わってくると考えられたのではないのでしょうか。ケガレを祓うとは、死者も生者もが、本質的に「氣」を取り戻すための方策だったのでしょうか。死者は、儀礼に則って丁寧に扱われること、すなわち、生前に近い人々と共に儀礼に参加することによって、肉体の担っていた「生」を終わらせていくのかもしれませんが、そのようないわば「つながりの確認」は、遺された人々にとっても、故人の「生」と「死」とを受容させて、さらには、自分自身の「生」とのかかわりを考えさせるものとなっているようです。

人間が死ぬと「靈魂」が「肉体」から分離していくと考えられていたこと、死者の霊を怖れることと、その靈魂が「カミ」あるいは「先祖」となるということ。死をケガレと見なすこと、そこから立ち返ること。これらに内在する諸々のものは、時には相容れないものであったとしても、生と死、生者と死者を繋いでいる諸々のものとして、儀礼を通して表現されてきたと思われる。

ところで、何げなくテレビを観ていると、マダガスカル(マダガスカル)の「Famadihana(ファマディハナ)」という儀礼が映っていました。5年経過した遺体の墓所を掘り返し、そこから遺体を取り出して、遺体を包んでいた布を交換するというものです。親族や知人など多くの人々が墓所(家のように大きなものでした)に集まり、取り出された遺体は、3~4人から5~6人に抱え上げられ、人々の歓喜や明るい音楽、踊りによって迎えられていました。この儀礼は、「死者の発掘の祭」「祖先をめぐる祝福の儀礼」、また、「死者とのダンスパーティ」とも表現されるようなものでした。遺体を迎える人々が、満面の笑みで遺体を持ち上げながら人々とともに、いとも楽しそうにしている姿が映し出されていました。その後、掘り出されたいくつもの遺体は並べられて、新しい布に包み替えられます。マダガスカルの人々は、ほんとうに嬉しそうに、遺体となった故人との再会を祝っているように見えました。インタビューに答えていた老婦人は、5年前に亡くした娘との再会について「娘を失ったのは悲しい。けれど、きょう、こうしてまた娘と会えてとても嬉しい」と涙ながらに語っていました。

この儀礼は、一般には二次葬と呼ばれているものと思われる。マダガスカルでこの伝統を受け継いでいる人々にとって、故人との再会は、喜びそのもののように見受けられました。深澤秀夫さんは、たとえばキリスト教徒に改宗していたとしても、この伝統を保持する人々は、キリスト教での葬儀をした後で、「その故人の故郷のしかるべき墓に遺体ないし遺骨を納めることは、その家族や親族にとっての免れることのできない義務である一方、そうやって埋葬された死者は今度は祖先として子孫に祝福を与える存在として儀礼において直接に呼び求められるのである」「墓内に安置した遺骨を包んでいる高価な絹や天蚕の布を取り替えるファマディハナと呼ばれる祭りを盛大に祝う」と述べています(深澤秀夫「マダガスカル断章 マダガスカル 過去と現在の対話が織りなす世界」『季刊民族学』1998年86号、pp.14~33参照)。

マダガスカルでは、「Alive, we will live together in the homes, dead, we will live together in the tombs.」という言葉の伝えがあるといいます。人々は、死者であれ、生者であれ、共に暮らしているという感覚があるように見えます。しかも、死者は生者に幸福をもたらしてくれます。生者と死者との間には、ただ愛情や親愛のみがあるように感じられました。(番組では、5年毎に遺体の布を取り替えるというナレーションでしたが、7年に1度、白骨化するのを待つ20~30年後に掘り出すという地域・人々もあるようです)。

こうしてみると、人は、死を思いながら、意識しながら、生きていくということが、あらためて分かってきます。死や死者について考えることが、今や将来の生き方への反省や希望となっていることもあるでしょう。儀礼という「形」として示される死の事実は、必ずやってくる「私自身の死」への準備になっていきます。死は生きていくことの「証し」であるなら、「死」を想いつつ生きることの意味を積極的に意義付けることが大切になってきます。